慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	サルウィン・シャピロ氏著 コンドルセーと自由主義の興起
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1935
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.29, No.6 (1935. 6) ,p.875(129)- 879(133)
JaLC DOI	10.14991/001.19350601-0129
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19350601-0129

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

サルウィン・シャピロ氏著『コンドルセーと自由主義の興起』

高橋誠一郎

コンドルセー(Marie-Jean-Antoine-Nicolas Caritat, Marquis de Condorcet)の最後は極めて悲愴であつた。大革命に際してヂロンド黨員として活躍した彼れは、一千七百九十三年七月八日、ジャコバン黨議員シャボー(Chabot)によつて國民議會に告發せられた。同議會はシャボーの動議を通過し、コンドルセーの逮捕を命じた。彼れをしてジャコバン黨員の忿怒を買ふに至らしめたものは、彼れが匿名を以つて秘密に印刷に附した小冊子、『新憲法に關して佛國民に告ぐ』(Aux citoyens français. Sur la nouvelle constitution.)と題するものであつた。彼れは其の友人カバニース(Cabanis)醫師の警告によつて漸く其の身を免るゝことが出來た。コンドルセーの友人等は彼れを彫刻師の寡婦ヴェルネ夫人(Madame Vernet)が學生の爲めに經營する閑靜なセルヴァンドニ街二十一番地の下宿屋に匿つた。彼れの家族は極貧の淵に陷つた。アダム・スミスの大著『道德情操論』の翻譯者として知られてゐるコンドルセー夫人(Sophie de Grouchy)は織畫を描き、リンネル下着類を賣つて其の夫と娘とを養つた。

コンドルセーはヴェルネ夫人の下宿に九ケ月間潛伏して居つた。彼れは其の間に於いて革命中に於ける自己の行

動を辯明するが爲めに筆を執つたのであるが、夫人の諫めを容れて之れを中止した。Fragment de justification. として今日に傳はるものが即ち是れである。彼れは自己を人類の前に辯明するよりも、人類其の者を辯明せんとするの動機に驅られて、殆んど書籍及び手控の力を借ることなくして『人類精神進歩の史的概觀略記』(Esquisse d'un Tableau Historique des progrès de l'esprit humain.)を著した。斷頭臺の黑影に覆はれながら、彼れは靜かに人類の完全性に就いて記述しつゝあつたのである。(J. Salwyn Schapiro, Condorcet and the Rise of Liberalism, 1934, pp. 105.)。

一千七百九十三年十月三日、革命裁判所に於いて彼れが死刑及び財産没收の宣告を受けたと云ふ報知が傳つた時、彼れは累をヴェルネ夫人に及ぼす可きを憂へて、其の下宿を去らんとした。而も夫人は之れを拒んで曰く「國民議會は貴下を法律の外に置くの權能を有して居るが、而もそは貴下を人道の外に置くの權能を有して居らぬ。貴下は止る可きである」と。然しながら、家宅捜索の取沙汰に脅かされて、九十四年四月五日(或ひは曰く、三月二十五日と)の朝、彼れは遂に夫人の眼を盜んで、彼の女の家から忍び出た。二日間、彼れはホラティウスの詩篇をポケットに入れたまゝ、空腹を抱へ、痛める足を引き摺りながら、巴里郊外クラマールの石切場を徘徊した。飢餓に堪へ兼ねて、彼れは、とある下等な宿屋に入つてオムレツを求めた。卵子を幾つ入れるかを問はれた時、彼れは出鱈目に「十二」と答へた。此の答と彼れの異常なる風體とは人々に不審を抱かしめなければ已まなかつた。彼れは遂に捕へられて、ブールグ・ラ・レーンの獄舍に留置せられた。其の翌日、即ち一千七百九十四年四月八日の朝、牢番が彼れを巴里に送るが爲めに其の檻房に入つた時、彼れは冷たき死體と爲つて床の上に横はつてゐた。最初のコンドルセー傳の著者アラゴオ(M. F. Arago.)に從へば、彼れは指輪の中に入れて居つた强烈なる毒藥を嚥んで斷頭臺を回避したと云はれてゐる。(Biographie de Jean-Antoine-Nicolas Caritat de Condorcet, Œuvres, publiées par A. Condorcet O'Connor et M. F. Arago, 1847-9, I, p. cli-clvii.)。然しながら、彼れの死體を檢視した醫官は其の死因を以つて充血(congestion sanguine)と斷定してゐる。

コンドルセー研究の文献は今日に至るまで必ずしも尠しとしないのであるが、吾人は最近又、ジェ・サルウイン・シャピロ氏によつて、彼れが自由主義發生時代の完全に近い代表者として描出せられたことを欣ぶものである。シャピロ氏は其の著を第一章、緒言、第二章、第十八世紀中に於ける佛蘭西の社會的及び經濟的變化、第三章、所謂「フィロソーフ」の發生、第四章、佛蘭西革命前のコンドルセー、第五章、佛蘭西革命中に於けるコンドルセー、第六章、政治的自由主義、第七章、知識的及び社會的自由主義、第八章、經濟的自由主義、第九章、宗教的自由主義、第十章、女權主義、第十一章、普通教育、第十二章、亞米利加の再發見、第十三章、進歩の觀念、第十四章、コンドルセーと自由主義に分つてゐる。就中、吾人に取つて特に興味あるものは、彼れの經濟的自由主義と其の進歩の思想である。

著者は曰く、經濟理論に於いては、コンドルセーは決して師匠ではなく、常に弟子であつた、而して彼れは時にはケネーの弟子であり、時にはアダム・スミスの其れであつたが、而も概してテュルゴオの弟子であつたと。(ibid., p. 176.)。彼れは實に此の偉大なる友人の感化によつて經濟學方面に注意を向けたのであつた。彼れは彼れが『百科全書』中に寄せた Monopole et Monopoleur. の項目、一千七百七十五年に上梓せられた Lettres sur le commerce des grains. 同七十六年の Les Réflexions sur le commerce des blés. 及び同八十一年の Réflexions sur

l'esclavage des Nègres. に於いて穀物交易の自由及び奴隷廢止を主張し、七十五年にネッケルに反對せる Lettre d'un Laboureur de Picardie à M. N. (Necker) auteur prohibitif, à Paris. を初めとして、一千七百八十九年の Banque nationale, 同九十年の Mémoires sur la fixation de l'impôt. 及び Mémoires sur les monnaies. 等に於いて其の財政經濟意見を表明した。彼れは又コンディアックの價値に關する解釋を採用したが、之れに對して多くを附加することがなかつた。(Schapiro, p. 176.)。

而も、經濟學說史上に於いて特にコンドルセーの名を顯著ならしめたものは恐らく曩きに揭げた彼れの死後の出版『人類精神進歩の史的概觀』がウィリアム・ゴッドウィンの『政治的正義論』と共に、トーマス・ロバート・マルサスを して其の人口論を起草せしむるに至つた事實であらう。彼れはマルサスの書の現るゝに先立つて生活資料との關係に於いて人口增加の問題を考察した。(『三田學會雜誌』第二十九卷第一號所載拙稿『トーマス・ロバート・マルサスと彼れの所謂經濟學上の新學派』參照)。而して這般の問題に對するコンドルセーの解答は後年のマルサス學說反對論を豫示するものがある。本書の著者は固より此の點を觀過してゐない。(ibid., p. 258.)。加之、ジェームズ・ミル及びジョン・スチュアート・ミルの社會哲學も亦、明かにコンドルセーの思想によつて感悟せられてゐる。彼れはアレヴィ氏(Elie Halévy)の名著 La Formation du radicalisme philosophique, 1901-4. に依據して、コンドルセーの社會進歩に關する見解が深く英國に於ける功利主義者の意見に影響を及ぼしたことを述べてゐる。(Schapiro, p. 262.)。佛蘭西に於いては彼れの社會進歩の觀念、而して殊に將來に於ける黃金時代の强調はサン・シモン及びフーリェの空想的社會主義派の思辨に暗示を與へた。(ibid.)。著者は又、サン・シモンよりも遙かに大なる『概觀』の讃美者をオーギュスト・コントに於いて看出してゐる。(ibid., p. 263.)。

斯くの如きは固より本書の著者を俟つて初めて明かなる所ではないが、而も吾人は本著に據つて、コンドルセーの諸著中に看出さるゝ自由主義哲學のあらゆる方面が悉く明確に表示せられたことを多としなければならぬ。

（紐育ハーコート・ブレース會社發行、三百十一頁、丸善株式會社賣價金十二圓二十五錢）